

みずのき作品群の保存とアーカイブ作成への協力と作業支援
平成29年度 活動報告

本研究は2016年度よりスタートし、2年目となる本年度から芸術資源研究センターのプロジェクトの一つとなりました。2016、17年度ともに京都市立芸術大学特別研究助成を受け、学内の共同研究者に加え、みずのき美術館関係者および学生を中心とした作業協力者が参加し活動しています。

「みずのき寮絵画教室」（1964 - 2001）は、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）日本画出身の西垣壽一（にしがきちゅういち／1912 - 2000）氏が1964年に亀岡市に位置する知的障害者更生施設であるみずのき寮（現在は社会福祉法人松花苑みずのき）において選抜入所者（重度知的障害者）を対象に開設し、以降生涯にわたって指導にあたった絵画教室で、日本における知的障害者と創作活動を結ぶ支援活動の中でも草分け的存在として知られています。氏の活動はアウトサイダーアートあるいは福祉と芸術を巡る解釈や言説の変化、考え方や様相の推移により、時代ごとに様々な評価の対象ともなってきた極めてユニークな業績であるといえます。また、この絵画教室より生み出された絵画作品群が、ごく初期に廃棄されたものと、アール・ブリュット美術館（スイス／ローザンヌ）への数十点のコレクションを除き、現在まで散逸しない状態でほぼ完全に施設内に収蔵されてきた点も稀有で貴重なケースといえます。

みずのき寮では、「みずのき寮絵画教室」の活動に加えて、同好会的な性格の「みずのき寮絵画クラブ」の活動が並行して実施されており、この活動で制作された作品もまた同様に収蔵されています。「みずのき寮絵画クラブ」の作品群の中には個人名が記されていないものが多く含まれていますが、「みずのき寮絵画教室」のメンバーの作品と思われるものも散見されます。この二つの活動は、施設内で同時並行的に存在していた性格の異なる創作活動として相補的な検証対象であるといえます。

現在収蔵されている作品数は、「みずのき寮絵画教室」の作品が約9000点、「みずのき寮絵画クラブ」の作品が約9000点で、総数約18,000点にのぼります。内訳としては、様々なキャンバス・サイズのタブロー、木製パネルに和紙を貼り付けたもの、合板に直接描かれているものなど多彩ですが、約15,000～16,000点あまりが四つ切り、八つ切りと呼ばれる画用紙や同程度のサイズの紙に描画された作品です。

2012年に同市内に日本財団アール・ブリュット美術館としてオープンしたみずのき美術館では、2016年度より日本財団の助成を受け、みずのき施設内に所蔵保管してきた「みずのき寮絵画教室」および「みずのき寮絵画クラブ」作品群（本研究では両者をまとめてみずのき作品群としています）を対象に、施設内に設けた新たな倉庫の機能改修と作品移動、またこれに際しての作品保存状態の改善、全作品のデジタルアーカイブ化と公開、成果展示などの事業に取り組んでいます。

本研究は、この事業の一環であるアーカイブ・データ作成のための作品画像の撮影を中心とした協力および作業支援を行うことを目的としています。また、この協力や作業支援を通じて、「みずのき寮絵画教室」「みずのき寮絵画クラブ」の実態調査を行おうとするものです。

これまで、前述の画用紙および同程度のサイズの紙に描かれた作品を対象に、昨年度は「みずのき寮絵画教室」の作品約8800点、本年度は「みずのき寮絵画クラブ」の作品約4500点について大学内での撮影作業を実施してきました。さらに、本年度内に「みずのき寮絵画教室」の作品約250点の木炭紙サイズの作品、来年度は「みずのき寮絵画クラブ」作品約4500点の撮影を予定しています。

なお、上記以外のタブローをはじめとする大型作品などについては、移動の困難さや大学内での保管体制の困難さ、また相応の輸送経費が予想されることから、みずのき美術館独自で撮影作業を行っています。

本研究での撮影分と合わせて、来年度にはほぼ全ての作品についての撮影作業が完了し、同時にみずのき美術館で進められているアーカイブ・データベースの作成作業も完成し公開される予定です。

中原 浩大（美術学部教授）